

芥川龍之介「羅生門」脚色

男はひとけのない歩道を当てもなく歩いていく。都心から少し離れたここは、高度経済成長期に建設されたニュータウンであったが、人口激減のため、今はゴーストタウン感のある町である。太陽は真上から彼を照らし、夏の暑さに耐えられず、近くの地下鉄の入り口へ入っていった。

静かな駅には、男以外、誰もいない。その小さな構内を照らしているのは、階段から入ってくる陽の光と、点滅している蛍光灯の光、そして券売機や改札機の液晶画面だけであった。暑い外と比べ、駅内は恐ろしく寒く感じられた。その違和感に、男は鳥肌がたった。

駅の暗さに目がなれてくると、壁際や階段に、ホームレスが数人、床のコンクリートに寝転がっている姿が、男の目に映った。微動だにしない彼らの姿は、まるで死人のよう。外から差し込む、かすかに漏れてくる光が、彼等の体の一部だけを照らし、機械の冷たい光と対照した。

男は、まるで時間が止まっているような息苦しさを感じた。外から漏れる太陽光が埃に反射し、きらきら光っている。それだけが時間の流れを気づかせてくれているように思えた。

そこら辺に寝転がっている彼らの中には、元は、男のように正直な社会人だった人も、自慢の家長だった人も、あるいは大切な息子だったかもしれない。おそらく彼らのほとんどは、居場所を無くして、社会から追い出されたのであろう。世界から拒否され、希望を失った彼らは、まるで昆虫の抜け殻のように見えた。

男は「自分は彼らのような末路は辿らない。どうして真面目に生きてきた自分が、」と、彼らの姿と自分に、距離感を置いた。

その瞬間、男の立っている後ろから、誰かが走って階段を降りてくる足音がした。振り向くと、そこには一人の青年がいた。目を隠す程に長く、何日も洗っていないようなべたついた髪の毛をしていた。よれよれのシャツの上に、滲みだらけのジャケットを着て、左手には安っぽいブリーフケースを握っている。大学を出たばかりなのだろうか、身なりからして就活に勤しんでいるようにも見えるが、あまりにも清潔感がなさすぎる。

その不審な青年の姿を、男は目で追った。

青年は駆け足で改札口へ向かった。皆カードを使う今、券売機を素通りすることは不思議なことではない。ところが、青年の次の行動は男を驚かせた。

青年は、素早い動きで自動改札機の柱を片手で握り、その上を飛び越えようとした。

男は青年の腕を掴んだ。

「おい、君。」

その瞬間、一筋の太陽光が反射し、男の目を引いた。青年の腕には、彼の身なりからしても歳からしても分不相応な、高価そうな腕時計がはめられていた。多分、親から譲り受けたものとかなんだろうと、男は思った。その時計に釘付けになっている男を見て、青年はイラついた口調で言い出した。

「なんなんだよ。」

男はまた青年の顔に目を向けた。しかめた顔で、口を開いた。

「いくら急いでいるからといって、そんなことをしてはいけないだろう。見れば大卒出たばかりのようだが。そんな心得では、どこにも就職できないぞ。」

青年は、男の目を直視しながら、言い返した。

「俺は今、バイトの面接に遅れそうなんだ。話している暇などないんだよ。」

男は戸惑った。彼は理解ができなかった。いつも正しい行動を取ることをプライドとして生きてきた彼には、青年の小さな過ちさえ許せなかった。

もちろん、そのような価値観が社会で認められるのかは、別問題である。

戸惑っていた男の姿を見て、青年はため息をつき、ムカついた口調で言った。

「おじさんが何を言おうとしているかはわかる。「もっと真面目に生きろ」とかの一般論だろう。でもな、おじさん。そんな心がけじゃ、今の世の中では食っていけないぜ。俺はな、一生懸命勉強して、大学卒業しているけど、どこかのバイトです

ら就職できなかつたんだよ。今日の面接が何週間ぶりなのかも覚えていない。今は家賃を払う金も、食物を買うお金も何もない。勿論交通費もな。」

怒っているように始まった青年のその言葉は、だんだん、自暴自棄に聞こえる。

男のしかめた表情は、固まったままである。しかし、話を聞いているうちに、彼の心の中では、さっきのような、青年を戒めたときのような正義感は無くなっていった。その辛そうで、かすかに共感できる彼の話を聞いていると同時に、男の心に、とある勇気が生まれてきたのであった。

青年が黙ると、男は無言で、彼の腕に目を移した。

「そうだな。」

男が周りを見回すと、彼の目に入って来るのは、さっきのホームレスの姿だけであつた。彼は一瞬、決意に満たされたような目で、つかんでいた青年の腕を強くねじった。

「だったら、これを持っていっても私を恨むな。私も今朝、会社から首にさされてね。」

男はもう片方の手で、素早く青年の腕時計を外した。それをポケットにしまった彼は、足早に、外の暑さへと出て行ったのであった。